

令和 4 年 9 月 12 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02611

研究課題名(和文) 病気の子供を包摂する学びとケアの共同体づくりのための教員研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a teacher's program to create communities of learning and care for children with diseases

研究代表者

竹鼻 ゆかり (TAKEHANA, Yukari)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30296545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、病気の子供と周囲の子供たちが共に学び育ちあうための教員研修プログラムの開発(作成,実施,評価)である。4年間全体を通じて行った成果は次のとおりである。

- 1) 調査研究と成果発表として、院内学級の教員、20代の若者の病気の人に対する認識などの調査を行った。
- 2) 作成した教材ならびに研修として、ケースメソッド教育教材としてケースブックの作成、ならびにケースメソッド教育の実施と評価、1型糖尿病啓発パンフレット英語版の作成、外国につながる子どもと保護者に保健室と養護教諭を紹介するパンフレット作成を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、病気の子供を理解し支援するため、教諭・養護教諭向けのケースメソッド教材を作成したこと、外国につながる子どもと保護者に保健室と養護教諭を紹介するパンフレットを作成したことならびにインクルーシブ教育を勧めるための研修プログラムを開発したことである。ケースメソッド教材は、病気をはじめさまざまな健康弱者の理解と支援を促す教材として活用可能である。さらにパンフレットは日本の教育独自の保健室と養護教諭を理解するための啓発資料として活用が期待される。また開発した教員研修プログラムは、病気の子どもの理解と支援を促すインクルーシブ教育を勧めるうえで、有用である。

研究成果の概要(英文)：This study was designed to develop a teacher's program to create a community of learning and care for children with diseases. Results of this study clarified the following points.

- 1) This study evaluated the following: Processes of growth and development in teachers of in-hospital schools, classroom teachers' support process for children with developmental disabilities; processes of change in attitudes and responses of young teachers to child health. Results clarified that teachers, through their experiences and encounters, deepened understanding of children with diseases. 2) This study developed a teacher's program to create communities of learning and care for children with diseases.

研究分野：健康教育

キーワード：病気の子供も インクルーシブ教育 多職種連携 教員研修 ケースメソッド教育

1. 研究開始当初の背景

小児慢性特定疾病は14疾患群(722疾病)にのぼり、学齢期の入院患者は2万人弱、外来患者は50万人ほどいる¹⁾。彼らの大半は重複する障害がないかぎり通常学校に在籍している。一方、病気による長期欠席者は小中学校の長期欠席者数の約2割、4万人ほどおり²⁾、不登校児童生徒の約1割、1万人ほどは病気がきっかけとなっている²⁾。また学校では、病気の子供は、外見の変化からいじめにあう、記憶障害により学習に遅れが出る、病気を理由に差別を受ける、仲間外れにあう等、病気の子供の教育環境は十分ではない。つまり、病気の子供に関わる学校教育の課題は看過出来ない状況にあるにもかかわらず、学校教育において病気の子供への合理的配慮は未だ進まないといえる。

病気の子供は、病気の経験を糧とし逞しく成長発達しているが、病気の影響による肯定的な姿を捉えた報告は少ない。そこで、病気の否定的影響のみに着目するのではなく、彼らの病気による経験や認識を明らかにし、病気の子供が病気と共に自分らしく生きていくための教員や学校での支援を考えることが必要である。

しかし、病気の子供と共に生活する周囲の子供達は、彼らをどのように認識し、対応しているかについての研究はほとんどなく、周囲の子供たちが病気の子供と共に助け合いながら生きる態度を育てる教育は未だ十分ではない。そのため、周囲の子供たちに対しても病気の友達を中心とし、皆が助け合い支えあいながら生きることを学ぶ教育を行う必要がある。

一方で、教員は多忙を極める上に、学校保健や社会福祉を学ぶ機会はほとんどなく、疾病や障害、連携機関に関する知識や理解不足がある³⁾。そこで、時代のニーズに応じ、病気の子供を視点とした学びとケアの共同体づくりを行うためには、新たな教員研修なくしては対応できない。

つまり、インクルーシブ教育システムが推進される今日、病気の子供、周囲の子供、教員や学校等の課題解決を目指した包括的な教員研修プログラムの開発が必要である。

【文献】

- 1) 文部科学省：平成27年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に対する調査
- 2) 厚生労働省：平成26年患者調査
- 3) 竹鼻ゆかり，朝倉隆司：病気と共に生きる子どもに対する発達保障のための学校組織ならびに教員の支援プロセス—M-GTAを用いた分析—，学校保健研究，58(3)，154-167，2016

2. 研究の目的

本研究の目的は、病気の子供を包摂する学びとケアの共同体づくりのための教員研修プログラムを開発することである。

具体的には調査研究とプログラム開発の2つから成り立ち、具体的には以下の研究を行った。

研究1：院内学級の教師の成長プロセス

目的：インタビュー調査により、院内学級の教師の成長プロセスを明らかにすること。

研究2：小学校における発達障害の子供に対する学級担任の支援プロセス

目的：インタビュー調査により、発達障害の子供に対する学級担任の支援プロセスを明らかにすること。

研究3：病気の人に対する20代の若者の支援行動に影響を与える心理社会的要因

目的：アンケート調査により、病気の人に対する20代の若者の認識やベネフィットファインディング、発達資産など支援行動に影響を及ぼす心理社会的要因を明らかにすること。

研究4：1型糖尿病患者の病気の受け入れや患者会の役割に関する調査

目的：アンケート調査により、SNSコミュニティにおける1型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因を明らかにすること。

研究5：小学校における子供の健康に対する若手教員の意識と対応の変化のプロセス

目的：インタビューにより、小学校において、若手教員が子供の健康に対し、どのような意識をもち対応をしているのか、その変化のプロセスを明らかにすること。

研究6：院内学級の教師の成長に影響を及ぼす心理社会的要因

目的：アンケート調査により、院内学級の教師の成長に影響を及ぼす要因を明らかにすること。

研究7 プログラム開発

上記の結果をふまえ、病気の子供の理解と支援ならびに、病気と共に生きる子供の成長発達を促す関わり、周囲の子供たちへの教育等、を行うための教員研修プログラムの開発(作成, 実施, 評価)を行う。

3. 研究の方法

研究1：院内学級の教師の成長プロセス

普通学校に設置された病弱・身体虚弱児特別支援学級のうちで、教室が病院内にある、いわゆる院内学級の担任6名(女性6名)を対象に、個別の半構造化面接により、「院内学級の教師になった経緯」「子どもや保護者、病棟スタッフとの関わり」「苦労したことや自身の成長」等を尋ねた。分析にはM-GTA(Mundified Grounded Theory Approach)を用いた。

研究2：小学校における発達障害の子供に対する学級担任の支援プロセス

関東の小学校において、発達障害の子供の在籍する学級の担任経験をもつ小学校教員7名を対象とし、個別の半構造化面接により、「印象に残っている発達障害の子供について」「学級担任として発達障害の子供に望む姿と、どのようにその子供と関わったか」「発達障害の子供と関わる中で学んだこと、教師として考えが深まったこと」「発達障害の子供が在籍する学級で大切にしていること」について尋ねた。分析にはM-GTAを用いた。

研究3：病気の人に対する20代の若者の支援行動に影響を与える心理社会的要因

全国の20代の若者500人に対しA社のWebアンケートを用いた調査を行った。有効回答・分析対象数は500人(100%)であった。

調査内容は、基本的属性として、性別、立場、結婚の有無、子供の有無などである。また、対象者本人や近親者の病気にかかった経験などに関する項目と病気の「経験による影響」、20代の若者の病気の人に対する行動に影響を及ぼす心理社会的要因として、先行研究を参考とし、「病気に対する認知」13項目、4件法を作成した。「病気に対する認知」は、否定的なイメージ7項目、病気の経験から得る肯定的な気付き6項目とした。加えて、病気に関する発達資産を測定するため20項目、4件法を作成した。また、「病気の人に対する支援行動」5項目、4件法を作成し、心理社会的要因の従属変数とした。病気の人に対する支援行動と各変数の関連性を検討するため、男女別で重回帰分析を行った。

研究4：1型糖尿病患者の病気の受け入れや患者会の役割に関する調査

SNS上にある1型糖尿病患者グループXの78人に対し、Google Formを用いた自記式の質問紙調査を行った。調査内容は基本属性性別、発症年齢、コミュニティ所属年数、日常に利用しているSNSの種類、他の1型糖尿病SNSコミュニティの所属数、SNSコミュニティの影響要因等とした。分析は、病気の受け入れと各変数の関係性を検討するため、重回帰分析を行った。

研究5：小学校における子供の健康に対する若手教員の意識と対応の変化のプロセス

東京都ならびに関東近県の小学校に勤務する若手教員8名に対し、2019年9月～2019年11月にかけて半構造化インタビューによる調査を行った。インタビュー内容は、子供のけがや病気の訴えの対応で困ったことや悩んだこと、集団への指導の中で困ったことや悩んだこと、教員になる前に学ぶべきだったことなどである。分析にはM-GTAを用いた。

研究6：院内学級の教師の成長に影響を及ぼす心理社会的要因

東京都立病弱特別支援学校5校、都内病弱特別支援学級5校他、計20校で病院内において病弱教育を担当している教員に対し、郵送による自記式質問紙調査を行った。配布数は321名。回収数は236名分(回収率75.6%)。分析に必要なデータに欠損のあるものを除いた有効回答215名分(有効回答率91.9%)を分析対象とした。

調査内容は、心理社会的要因、院内学級の教師としての価値観、院内学級の教師の成長の姿とした。分析は、教師の成長の姿を従属変数としたパス解析を行った。

研究7：研究1から6の結果をふまえ、研究者間で協議し、教材作成を行った。

4. 研究成果

研究1：院内学級の教師の成長プロセス

院内学級の教師の成長プロセスは、まず院内学級に配属になった教師が【既存の知識と経験の限界の自覚】をしたあと、【院内学級の教師としての自覚】を培っていく中で、【院内学級の教師としての力量の獲得と教師観の構築】を経て、【院内学級の教師としての成長と自信】という姿が示された。また、このプロセスにおいて、[学校と病院との組織の違い]と[子どもや保護者の姿]が影響を及ぼしていた。さらに、それぞれのカテゴリーとサブカテゴリーは「実践力の形成」と「認知的・精神的変化」に分類された。各プロセスにおいてお互いに影響しながら、次の段階に進んでいたことが示された。

研究2：小学校における発達障害の子供に対する学級担任の支援プロセス

学級担任による支援プロセスは、まず自らの教育観といえる【教師の根底に有り続けるマインド】が常にあり、【発達障害の子供に対する教師の考えや願い】を基に【一人一人の子供に合わせた方法】により【発達障害の子供に対する働きかけ】を行っていた。このプロセスにより、学級環境や学級の雰囲気づくり、支援体制の構築が行われ、様々な方面から発達障害の子供への合理的配慮が行われていた。

研究3：病気の人に対する20代の若者の支援行動に影響を与える心理社会的要因

因子分析により、病気に対する認知は「否定的イメージ」「ベネフィットファインディング」の2因子、発達資産は「集団や社会における自己認識」、「社会的能力」、「自己肯定感」の3因子を得た。男女別の重回帰分析の結果、「病気の人に対する支援行動」に影響を及ぼす要因は、男性は「経験による影響」「否定的イメージ」「ベネフィットファインディング」「社会的能力」「自己肯定感」であった(調整済み $R^2=0.64$)。女性は「経験による影響」「否定的イメージ」「社会的能力」「自己肯定感」であった(調整済み $R^2=0.45$)。本結果から、病気の人に対する若者の支援行動を促すためには、若者の自己肯定感や病気に対する意識を高め、社会的能力を向上させる働きかけの必要性が示唆された。

研究4：1型糖尿病患者の病気の受け入れや患者会の役割に関する調査

因子分析により、「SNSコミュニティの要因」は、「病気の管理」、「メンバーからの励まし」、「仲間意識」、「肯定的感情の高まり」、「自己理解」の5因子を得た。重回帰分析の結果、「病気の受け入れ」に影響を及ぼすSNSコミュニティの要因は「病気の管理」($\beta = .36, p < .001$)、「肯定的感情の高まり」($\beta = .52, p < .001$)、「自己理解」($\beta = .14, p < .001$)であった(調整済み決定係数は $R^2 = .69$)。本結果から、1型糖尿病患者が病気を管理し病気を受け入れ、QOLの向上につながるように効果的にSNSを利用するには、「病気の管理」、「肯定的感情の高まり」、「自己理解」の経験が充実するような利用の工夫や利用体制づくりの必要性が示唆された。

研究5：小学校における子供の健康に対する若手教員の意識と対応の変化のプロセス

若手教員の意識と対応の変化のプロセスは、【経験と知識不足による不安と困難】を実感するところから始まり、【不適切な対応】を引き起こす。その後、【子供に対応してみても力量不足の自覚】をすることで、【知識に基づく対応の向上】が見られ、最終的に【子供の健康に対する意識の向上】が見られ、【子供の行動変容を促す働きかけの実践】を行うようになった。また、【他教員や保護者の姿勢】【研修による不安の高まり】が若手教員の意識に影響を及ぼしていることが示された。本結果から、若手教員は3年間で子供の健康への意識や対応を向上させていたが、初任段階の不安や困難感解消のために、早期から若手教員を支援する体制づくりを行う必要性が示唆された。

研究6：院内学級の教師の成長に影響を及ぼす心理社会的要因

因子分析の結果、院内学級の教師の成長は、【病気のある子供の理解と教育実践】と【関係構築力】、【子供感・健康観の変化】の下位尺度を得た。また、教育観は、【病気のある子供の成長と回復を促す教育観】と【病気と共に生きていく力を育む教育観】、心理的要因は、【院内学級への学びの意欲】と【肯定的な自己概念】、社会的要因は、【励ましや見守りの情緒的サポート・環境】【相談やアドバイスの情動的・道具的サポート】【病院からの評価的サポート】、子どもと保護者の出会いは、【家族や死との関わり】と【病気のある子供との出会い】の下位尺度を得た。これらの変数を用い、パス解析によりモデルを検証した。その結果、院内学級の教師の成長を促すためには、院内学級の教師の教育観の獲得を介して、心理的要因・社会的要因・子供と保護者との出会いが要因になるというモデルが支持された($\chi^2=0.09, df=3, p=0.99, CFI=1.00, SRMR=0.001, RMSEA<0.0001$)。本結果から、院内学級の教師の成長は、心理的要因、社会的要因、子供と保護者との出会い、教育観の獲得が影響することが示された。とりわけ院内学級の教師と

しての教育観の獲得は、成長を促す要因であることが示された。

研究7：

①教員研修のための教材作成

前述の研究成果をもとに、教員研修プログラムとして、ケースメソッドの教材を作成し、ケースメソッド教育による参加型研修を企画した。ケースは、新型コロナウイルス感染症対策、ゲーム依存、SNSによるトラブル、ヤングケアラー、貧困、慢性疾患、食物アレルギー、発達障害など、現代的教育課題をテーマとした。ただし、新型コロナウイルス感染症対策のため、大規模な研修会を行うことはできず、評価は今後の課題となった。

ケースブック表紙



ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック Part3

東京学芸大学 竹鼻研究室 (非売品) 2021年3月発行

編著 竹鼻ゆかり、齋藤千景、鎌塚優子

②1型糖尿病の啓発パンフレットの英語版の作成

かつて我々が作成した1型糖尿病パンフレット「教えてりんりん」の英語版を作成し、HP等で配信し、啓発を図った。

③外国につながる子供と保護者に向けたパンフレット「日本の保健室と養護教諭を紹介します」の作成

外国につながる子供と保護者に向けた「日本の保健室と養護教諭を紹介します」と題したパンフレットを作成した。本パンフレットは、外国につながる子供と保護者が、学校保健の仕組みを理解し活用できるようになることを目的に作成した。パンフレットは英語版(図1)、英語に対応した日本語詳細版、日本語の簡易版(図2)の3種類を作成した。今後、パンフレットは、都道府県教育委員会や地域の日本語指導教室へ配布したりWebにアップしたりして、活用を図る。

図1 英語版 表・裏表紙



中面



図2 日本語簡易版 表・裏表紙



中面



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 倉澤順子, 竹鼻ゆかり	4. 巻 72
2. 論文標題 小学生の死の認識といのちの大切さに影響する要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系	6. 最初と最後の頁 151-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 副島賢和, 竹鼻ゆかり, 朝倉隆司	4. 巻 62
2. 論文標題 院内学級の教師の成長プロセス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植美乃里, 竹鼻ゆかり	4. 巻 72
2. 論文標題 SNSコミュニティにおける1型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系	6. 最初と最後の頁 143-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森菜乃, 竹鼻ゆかり	4. 巻 72
2. 論文標題 小学校における子供の健康に対する若手教員の意識と対応の変化のプロセス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系	6. 最初と最後の頁 161-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹鼻ゆかり、馬場幸子、朝倉隆司、伊藤秀樹	4. 巻 62
2. 論文標題 軽度知的障害のある思春期女子の性的ハイルスク行動 特別支援学校高等部・定時制高校の教員へのインタビューをもとに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 351-361
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 副島賢和, 竹鼻ゆかり	4. 巻 62
2. 論文標題 院内学級の教師の成長プロセス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堀江万葉, 竹鼻ゆかり	4. 巻 71
2. 論文標題 病気の人に対する20代の若者の支援行動に影響を与える心理社会的要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系紀要	6. 最初と最後の頁 163-171
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上蓉子, 竹鼻ゆかり	4. 巻 71
2. 論文標題 小学校における発達障害児に対する養護教諭の支援プロセス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系紀要	6. 最初と最後の頁 137-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加瀬涼子、竹鼻ゆかり	4. 巻 61
2. 論文標題 病気の子どもに対する学級担任の支援行動に影響する要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20812/jpnjschhealth.61.3_157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 堀江万葉、竹鼻ゆかり、原口怜泉、山本綾香
2. 発表標題 病気の人に対する20代の若者の支援行動に影響を与える心理社会的要因
3. 学会等名 日本学校保健学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本綾香、竹鼻ゆかり、原口怜泉、堀江万葉
2. 発表標題 小学校における発達障害の子供に対する学級担任の支援プロセス
3. 学会等名 日本学校保健学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上蓉子、竹鼻ゆかり、渡邊みな美
2. 発表標題 小学校における発達障害児に対する養護教諭の支援プロセス
3. 学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 副島賢和、竹鼻ゆかり、朝倉隆司
2. 発表標題 院内学級の担任をする教師の専門性獲得のプロセス
3. 学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	朝倉 隆司 (ASAKURA Takashi) (00183731)	東京学芸大学・教育学部・名誉教授 (12604)	
研究分担者	副島 賢和 (SOEJIMA Masakazu) (00649436)	昭和大学・保健医療学部・准教授 (32622)	
研究分担者	高橋 浩之 (TAKAHASHI Hiroyuki) (20197172)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------